
名探偵大集合？！

snow+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵大集合？！

【Z-コード】

N8081A

【作者名】

snow+

【あらすじ】

「ナンのもとに、アイツからの挑戦状が……西の名探偵・外国
帰りの名探偵・迷探偵小郎（？！）なども参加し、東の名探偵ま
でも……？」

小包

「あつち～つ」

その日は太陽の照りつける日だった。毛利探偵事務所に、一人の子供：いや失礼。名探偵の声が響きわたる。

「なんなんだよこの暑さはよつ！－ゲ？！－32度もありやがる…」

あまりの暑さにバテているようす。……ある小包が届くまでは…。

ピンポーン！

探偵事務所のチャイムが鳴る。

「へいへい…」

ガチャ…そこには、一人の男性が立っていた。

「お届け物です！」郵便局の人みたいだ。その男性が持っている小包を見て、コナンが話しかける。

「あの…今大人がいなくて判子とかは…」

男性は全然困った顔をせず。

「いいや！ボウヤにお届け物だから、サインはいいんだよー！君、江戸川コナン君でしょ？」

ちょっと驚く。

「あ…そうだよ！ボク宛なの？」

男性から小包を受け取る。

「ありがとうね！」

小包を小五郎とコナンの部屋へ持ち込み、封を開けようとする。

「宛先がねえーな。…ん？」

カサカサ…小包を縦にふつてみせた。

「…軽すぎじやねえーのか。何が入つてんだよ？…ははーん…。

そういうことか

小包を開けた瞬間、コナンの顔が変わった。いつも憎たらしい口元…そして獲物を見つけた顔に…。

小包（後書き）

下手下手です……。
初投稿なのです。
続きはいつになるか分かりませんが……。
かなりあくと思いますが、読んでもらえたなら嬉しいです。

キッドからの挑戦状

「やつぱつな……。」
中から紙を取り出す。紙にまじて書こしてあつた。
『馬が南瓜に変わるとき

鈴木財閥の宝口
『ブラックリング』

を頂きに参上する。

怪盗キッド

…そ、う。この小包は、怪盗キッドからの挑戦状だった。
「つたぐ。やつぱりキザだねえ……」
同封してあつたバラを見ながら少し呆れる。
「でも、アイツにしては簡単すぎる暗号だな……。しかも実行日が書
いてねえーし……」

「ただいまーー！」ナン君、いるー？？
一階から、蘭の言葉が響きわたる。
「あつやつと帰つてきやがつたな。」
とブツブツ言いながら蘭のもとへ行く。彼女の前では、子供の口調
に早変わり。
「蘭姉ちゃんおかえりなさい！随分遅かったね？」
「やうなのよーー！園子と買い物行つたらわー、ついつい買ひすぎち
やうのよね」
彼女は、沢山の袋をコナンに見せる。
「（つたぐ。なんでこんなに買つモノがあんだよー）

い、いっぱい買つたんだねー！重かつたでしょ！（ハハハ…）

内心とは違う言葉がどんどん出てくるが、顔は少し呆れ顔。

「あ、コナン君そんなに落ちこまないでね」

「（はーーー？）」

蘭は、袋から服を取りだした。

「これっ！」

コナンの前でその服を広げて見せる。赤のボーダーの服だ。

「コナン君に絶対似合うと思つて買つて来たのっ！」

「ありがとう！」

コナンは服を受け取り満足げだ。

「何色もあつたから迷つたんだけど……」「うつ向き、急に暗くなる。

「ど、どうしたの…？」

「えつ？うつん…何色もあつたから…新…赤好きだから、コナン君にも赤が似合うかなって思つて…」

「（蘭……）」

瞳には涙がたまっていた。

「蘭姉ちゃん！ボクこの服一生大事にするから…だから…泣かないで…？」

「泣いてなんかないわよー！あいつのために流す涙なんかないわー！」

まるでわざと別人のよう、彼女は台所へ向かう。

「さーお腹すいたでしょ？」「めんねお昼過ぎちゃってー！」飯作るからね

エプロンをつけ、パタパタと忙しそうに、昼食の準備を始める。

「（蘭……）めんな…」

ボクも手伝つよー！」

キッドからの挑戦状（後書き）

下手です……（泣）
暗号も簡単すぎます…

てこうか、蘭が中心になってしましました～（汗）
話を広げようとしたらい

少しマイナーで…

でも次は関西弁男が登場予定なので、賑やかになると思います（笑）

平次との電話

「ただいま～であります～～！」

「ドアから酔っぱらった小五郎の声が聞こえる。

「おつお父さん？」

「（酔っぱらいオヤジ…）」

ネクタイを頭に巻き、酔っぱらいフラフラとした中年のこの人を

名探偵毛利小五郎と思いたくないのだが…

「蘭ちゅわ～ん！毛利小五郎ただいま帰りました～」

「もうお父さんたら！！昼間からお酒飲んで来たの？！」鼻をつまみながら聞く。

「事件を解決して～ 依頼人のお礼だ～ヒック！依頼人のお誘い断ることなんか～ヒック！出来ねえだろうが～

「もう…。夕食出来たら呼ぶから寝ててよね…」

小五郎の背中を押し、寝室へ連れて行く。

「大丈夫かな…おじさん…」

寝室へ入ると、足元に気付かないままキッドの挑戦状を踏みベットへ入る小五郎。

「あつそれ…」

「ん～？なんだあ～？こんな挑戦状邪魔だ～」

小五郎は挑戦状を手に持ち、ビリビリ破つていく。

「あ～～！！！？」

床に落ちた破れた挑戦状をかき集める。

「ちょっとお父さん！！コナン君の大事なもの破っちゃダメじゃない！」「ナン君、向こう行きましょ

蘭も紙を拾いながら手招きする。

「はあ～い。

（つたく…おつちゃん…ハア）」

ジリリリリリ！

事務所の電話がなると、事務所へ入って来た蘭が受話器を取つた。
「はいもしもし。あ？ 服部君？ どうしたの？ ノナン君？ いるわよち
よつと待つててね」

受話器を受けて取る。

「もしもし？？」

『おう工藤！ いてて良かつたわー！ あの姉ちゃんが出たさかい、び
びつたわー！』

受話器から関西弁の大きな声が聞こえてくる。

「…なんなんだよ、用件は？」

『夏バテしてんとひやんとひつとるか～？ 滅入れたる思て電話して
やつたんや…』

「切るぞ」

受話器を電話に戻しかける。

『あ～ちやうちやう！ 用件そんなんちやうがなー』

「つたく。初めから言えよ。で？ 何なんだよ？」

『なんかなあ…。怪盗キッドから挑戦状が来たんや』

「何？！」

思わず絶句してしまひ。

「どんな内容なんだ？…」

『なんや、泥棒する日しか書いてあらへんのや。工藤とこもーつ
たんかいな？』

「ああ来たぜ…。」工藤は時間と今回のターゲットが書いてあつた
「せやつたら、一枚で一つの挑戦状つちゅー」とか？』

「そつみたいだな」

口元がゆるむ。

「おー、その日を教えてくれ。日がないと先回りが…」

『ええでえ？ 今からそつち行くわな！』

「おっ！待つてる！……つて？！は？！オメヒ、またアポなしで…」

『今電話したからええやんか』

「あのなあ…」

『今渋谷にあるとかい、夜には着ぐと通り少し…おっちゅんや姉ちゅんにほあんばいゆーといへな』

「東京来てんのかよ…。まあ今回はキッズのことがあるからいつか。」

『さんきゅーな…ほなな…』

「くこくこ」

そういうことで、西の名探偵・服部平次が泊まるところになった。

「ねえねえ蘭姉ちゃん！今晚色黒がね…」

平次との電話（後書き）

なんか電話の部分の会話が変になりました…。
あ！でも関西弁はうまく出来たと思います

私、大阪人なので！

：当たり前か（笑）

関西弁は楽です

”ピーンポーン”

午後八時過ぎ、探偵事務所のインター ホンが鳴った。

「邪魔すんでも～！」

事務所のドアを開くと同時に、平次の声が聞こえた。

「邪魔するなら帰れ。」

「はいよ～…って、なんでやねん？！」

平次の声を聞くや否や、小五郎が突っ込み？、平次もノリ突っ込みをした。

「あんだけよ。大阪の色黒ボウズめ。アボなしで来やがって……」

ソファーに座っている小五郎は、煙草をふかしながら平次に言った。

「あら、和葉ちゃん！服部君！いらつしゃい。もう、お父さん！和葉ちゃん達が来たんなら呼んでもよね。」

「蘭ちゃん！遅なつてしもて堪忍な！平次がな……」

和葉が蘭に事情を説明しようとすると、平次が喧嘩腰に会話に入ってきた。

「なにゅうてんねん、自分？！和葉が渋谷であれやこれや見てるから悪いんやろ？！」

と詰うと、平次は和葉に持たされていた和葉が買つた大きなショッピング袋をドン～と和葉の足元に置いてみせた。

「やつて！大阪でないモンいつぱいあつたんやもん！…アンタこそなんやの？！推理小説ばつか買つて！…！」

と言つと、和葉は平次に持たされていた平次が買つた大量の本を乱暴に平次に差し出した。

「大阪は入荷が遅いんや！東京来た時に買わな意味あらへんやんけ！…そんなことも分からんのか、ドアホ！…！」

「なんやて？…！そんなん、アタシも東京来た時しか買われへんもん！…アンタ事件でよう東京来とるからええやんか！」

一人の喧嘩は、事務所内に響きわたった。小五郎はバカらしいと寝室に帰ってしまった。

その時、洗面所のドアが開き、コナンがやって來た。

”ガチャ”

「…一体何なの？」

「あ、コナン君！お風呂上がった？」

「うん。」

コナンはパジャマ姿でバスタオルを肩にかけ、一人の喧嘩を呆れ顔で見ている。

平次はそんなコナンに駆け寄り頭を撫で、和葉に向かいまた喧嘩腰で言った。

「ボウズ待つとつたでーーおい、和葉！俺はこいと男同士の話があるさかい、お前は姉ちゃんの部屋行つとけーー」

「ゆわれんでも行きますーー！」

和葉は平次に向かい舌を出し、蘭の背中を押しながら部屋へと向かった。

蘭と和葉が部屋へ行くのを見ると、コナンと平次も事務所のソファに座つた。

「…つたく。来るの遅いじゃねえーか。蘭がオメーらの分も料理作つてくれたんだぜ？」

「堪忍、堪忍！明日よばれるさかい！そんなんより、今はコレやる。」

と言つと平次は、バッグから怪盗キッドからの予告状を取り出した。

西の名探偵（後書き）

更新がかなり遅れました（汗）

このストーリーも、登場人物をたくさん出そうと思ってたりします。
まだ分かりませんが…。

予告状の解読

平次が持つて来た予告状には、こう書いてある。

『葉月、下記の絵の日に

『ブラッククリング』

を頂きに参上する。

怪盗キッド』

キッドの名前の中には、一枚の絵が載つていて、
犬が炎をまとつていてる絵だ。

予告状とにらめつこしていのコナンと平次は、やつと口を開いた。

「…葉月つつーと、八月つつーことだろ？」

「そんで、この絵が日にちの暗号やろ？なんなんや…この絵工。」

「コナンはあごに手をつき、深く考え込んでいる。

「犬、炎、炎、犬、犬、火、火、犬……！」

「火！？」

コナンの独り言に、平次も反応した。一人にいつもの電撃が走つた
ようだ。

「工藤！」

「ああ…。」

二人は向き合つと、いつものにくたらしい口元がゆがんだ顔になつた。

「火、犬、といえば、アレだよな……」

「コナンはソファーから立ち上がると、椅子に立ち事務所の本棚を探つた。そして探し当てた一冊の本を取り出し、確認した。

「…やっぱり、この日だ。」

コナンの確信した顔を見ると、平次もコナンの元へ駆け寄りその本

を覗き込んだ。

「……」の田やつちゅー」とか。

二人はまたソファへ戻った。

「これで田にちと時間と今回のターゲットも分かつたな……」
コナンは小五郎に破られたぐちやぐちやでテープで貼つてある予告状を出した。

「な……なんやねん、ソレ?……」

平次はその予告状を指差し、びっくりしたようだ。

「ああ。昼間おつむやんに破られたんだよ……。酔つ払つてたからな

……」

「ナンがため息をつくと、平次は新しい紙を取り出した。

「それやつたらよう分からんし、コノに印してくれや?」

「分かった。」

「ナンが新しい紙に予告状の内容を印し始めるとき、平次がコナンに話しかけた。

「……なあ、思つたんやけど、ブラッククリングで最近作られた宝石やろ? キッズでいつも歴史ある宝石ばかり狙つてんのとむやつんか? なんでや?」

「コナンは印すのに夢中で、適当に返事をした。

「さあな。そりやなんか理由があんだけりゆ?」

「あんなあ……。……つ?……」

平次は本気にしてないコナンに返事しようとしたが、誰かに見られているような気がして、事務所の窓を見た。

夜は暑いので、事務所の窓は夜でも寝るまでは開けっぱなしにしている。

「なんだ?」

「……いや、なんでもあらへんで!」

平次はそのまま立上がり風呂に向かつた。

「あんだよ……。」

書き写し終わったコナンも部屋に戻り、事務所の窓を閉めた。

その時、コナンも誰かの視線を感じた。

「……。」

コナンは無言で向かいのビルの屋上を睨んだ。

「（……なんなんだ、この感じ……。服部も、さつきいつだつたのか……。ま、考えすぎだよな。）」

コナンは窓を閉め終えると、予告状を手に持ち事務所の電気を消し部屋へ戻った。

「ははーん…さすが、名探偵。もう解いちましたかー。」

「コナンの感じ取った視線の通り、事務所の向かいのビルの屋上には、望遠鏡を持った黒羽快斗の姿が。

「あつ、ヤベ！見付かれる……。」

その時快斗は平次にこちらを向かれ、焦っていた。

なにやら快斗の耳にはイヤホンが。

「やっぱ盗聴機仕掛けにおいて、正解だつたな。」

そう。昼間郵便局の配達を装おり事務所を訪ねた時に、ドアの鍵穴に盗聴機を仕掛けていたのだ。

「探偵君もこっちを見てるな…。気付かれる前にずらかるか。」

と言つと、快斗は事務所と反対側の屋上から飛びおりた。

「いやつほー！」

快斗は途中でキッドに変装し、落ちる寸前にハンググライダーで飛び立つて行つた。

「対決の日を楽しみにしてるぜ、探偵君！…！」

キッドは夜の暗闇の中に吸い込まれるよう、消えていった。

予告状の解読（後書き）

暗号簡単かも。

てか、ある本？に書いてあります～！
どうやって解けたかは、まだ秘密です。
コナンと平次はいつもああなんで（笑）
快斗で出したけど…。

キッドってバレバレ！（笑）

今回キッド出すの早くしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8081a/>

名探偵大集合？！

2010年11月15日08時30分発行